



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 1



特
^ 4
3778





新古今集卷之五
 けんハ夜ぐくのゆふなり
 とうとさふめかんれをすも
 山の平ももをみたらさんや
 山の明白ふももをみたら
 あやすこハいそそ昔は山一
 天人こころをさそりけし
 たるゆあまのるい山といよ
 うけ山をみよのあまの



拾遺集第三卷
 けんハわしとハ山といり
 まろく切とせしといり
 まろく切とせしといり
 まろく切とせしといり
 山香の尾ハちがくもろく
 ちがくもろくもろくもろく
 いんんとそ杖の上はちがく
 あまのりこころをさそりけし
 うけ山をみよのあまの



持統天皇
 寛政七年
 千七百五十八



棟宇人丸
 寛政七年
 千七百五十八



後撰集第十五雜奇
 けふは方は一やとぬするを
 のづからいれぬもいふも
 ちたおぼしめされてさまた
 生元の宗と知れぬれども
 沈性の級へ即ちいふは昇
 とあつてはあひがごとく世と
 歎いてよむまじくは盲を
 ねり小川やまの



古くは九羅旅行
 けふは方は一やとぬするを
 のづからいれぬもいふも
 ちたおぼしめされてさまた
 生元の宗と知れぬれども
 沈性の級へ即ちいふは昇
 とあつてはあひがごとく世と
 歎いてよむまじくは盲を
 ねり小川やまの



暎丸
 こゝろやふの
 ゆもふの
 りれて
 ちも
 しうぬ
 遠坂乃関



春議
 九百七十五
 けふは方は一やとぬするを
 のづからいれぬもいふも
 ちたおぼしめされてさまた
 生元の宗と知れぬれども
 沈性の級へ即ちいふは昇
 とあつてはあひがごとく世と
 歎いてよむまじくは盲を
 ねり小川やまの



古今集第十七推奇

はかハ五世のまひ姫と名の
天女ト云々ナリナリまひ姫
に心を付するはあまの
おりのまひ姫と云々
同じまひのまひと云々
おりのまひのまひと云々
まひのまひのまひと云々
まひのまひのまひと云々
まひのまひのまひと云々



後撰集第十七巻

はかハ五世のまひ姫と名の
天女ト云々ナリナリまひ姫
に心を付するはあまの
おりのまひ姫と云々
同じまひのまひと云々
おりのまひのまひと云々
まひのまひのまひと云々
まひのまひのまひと云々
まひのまひのまひと云々



僧正遍照

上三白

あまのまひ姫と名の
天津風雲の



あまのまひ姫と名の
天津風雲の

陽成院

元正五年
九百三十五年

あまのまひ姫と名の
天津風雲の



あまのまひ姫と名の
天津風雲の

古今集卷第十八 雜歌

けむ八重のほのさうふらふら
よふ二つはあまのこいりんあ乃
序の目のかたてあつしを思ふ
仲八人ちとよふらふらふらふら
さうふらふらふらふらふらふら
さうの仲ふらふらふらふらふら
さうふらふらふらふらふらふら
さうふらふらふらふらふらふら



新古今集卷第十八 雜歌
けむ八重のほのさうふらふら
よふ二つはあまのこいりんあ乃
序の目のかたてあつしを思ふ
仲八人ちとよふらふらふらふら
さうふらふらふらふらふらふら
さうの仲ふらふらふらふらふら
さうふらふらふらふらふらふら
さうふらふらふらふらふらふら



古今集卷第十八 雜歌

けむ八重のほのさうふらふら
よふ二つはあまのこいりんあ乃
序の目のかたてあつしを思ふ
仲八人ちとよふらふらふらふら
さうふらふらふらふらふらふら
さうの仲ふらふらふらふらふら
さうふらふらふらふらふらふら
さうふらふらふらふらふらふら



いせ
住持
上三下

けむ八重のほのさうふらふら
よふ二つはあまのこいりんあ乃
序の目のかたてあつしを思ふ
仲八人ちとよふらふらふらふら
さうふらふらふらふらふらふら
さうの仲ふらふらふらふらふら
さうふらふらふらふらふらふら
さうふらふらふらふらふらふら



後拾遺集第十三巻
 けをいふのみのみかしの時か
 高すかふあをなるとるる
 後よふをせきしうちを
 じびゆれをといふちひのり
 てすかひなをいふちひ
 名のまては同れをいふ
 けをいふもいふ



古今集第十四巻
 けをいふのみのみかしの時か
 高すかふあをなるとるる
 後よふをせきしうちを
 じびゆれをといふちひのり
 てすかひなをいふちひ
 名のまては同れをいふ
 けをいふもいふ



元良親王 九百廿二



あらんとも
 けをいふ

素性法師 同四百五年



けをいふ

古今集第五秋歌
 けんはゆき風のふくかふ
 くさきのあやれしてその
 けをたいてげふも山風と
 かきてあらししむむか
 ハこのもももあひひを
 なるさりむむかあひひ
 んこむむかあひひのあ
 あらししむむか



古今集第五秋歌
 ひんがしのあやれはかふむ
 くさきのあやれしてその
 けをたいてげふも山風と
 かきてあらししむむか
 ハこのもももあひひを
 なるさりむむかあひひ
 んこむむかあひひのあ
 あらししむむか



げんやのやすいで
 文屋康秀 上三目ド

あらししむむか
 わさきの
 本乃
 しるし
 んこむむか
 あらししむむか



おのちとと月八百九十
 大に千里 幸

月しむ
 ちふか
 か
 なが
 つのむか
 わ



拾遺集卷十七 雜の類
 けふ亭子院大井川南幸
 てゆきしむる中をうら
 めんとしむるゆゑに
 今てのふれおきんも
 ちのふれおきんも
 向てふれおきんも
 心をいそぐるも



新古今集卷十一 雑
 けふ亭子院大井川南幸
 てゆきしむる中をうら
 めんとしむるゆゑに
 今てのふれおきんも
 ちのふれおきんも
 向てふれおきんも
 心をいそぐるも



ていふん
 貞信公
 八百六十六の



御幸
 今てふ
 わる
 心をいそぐるも

中納言兼捕
 八百六十六の



いづれ
 いづれ
 いづれ

十良今集第六卷
 けんハ心作ハハ心作ハ心作
 一ハ心作ハ心作ハ心作
 二ハ心作ハ心作ハ心作
 三ハ心作ハ心作ハ心作
 四ハ心作ハ心作ハ心作
 五ハ心作ハ心作ハ心作
 六ハ心作ハ心作ハ心作
 七ハ心作ハ心作ハ心作
 八ハ心作ハ心作ハ心作
 九ハ心作ハ心作ハ心作
 十ハ心作ハ心作ハ心作



今集第五卷
 けんハ心作ハ心作ハ心作
 一ハ心作ハ心作ハ心作
 二ハ心作ハ心作ハ心作
 三ハ心作ハ心作ハ心作
 四ハ心作ハ心作ハ心作
 五ハ心作ハ心作ハ心作
 六ハ心作ハ心作ハ心作
 七ハ心作ハ心作ハ心作
 八ハ心作ハ心作ハ心作
 九ハ心作ハ心作ハ心作
 十ハ心作ハ心作ハ心作



源宗平
 上三目



山は心作ハ心作ハ心作
 一ハ心作ハ心作ハ心作
 二ハ心作ハ心作ハ心作
 三ハ心作ハ心作ハ心作
 四ハ心作ハ心作ハ心作
 五ハ心作ハ心作ハ心作
 六ハ心作ハ心作ハ心作
 七ハ心作ハ心作ハ心作
 八ハ心作ハ心作ハ心作
 九ハ心作ハ心作ハ心作
 十ハ心作ハ心作ハ心作

元河内
 七言



心作ハ心作ハ心作
 一ハ心作ハ心作ハ心作
 二ハ心作ハ心作ハ心作
 三ハ心作ハ心作ハ心作
 四ハ心作ハ心作ハ心作
 五ハ心作ハ心作ハ心作
 六ハ心作ハ心作ハ心作
 七ハ心作ハ心作ハ心作
 八ハ心作ハ心作ハ心作
 九ハ心作ハ心作ハ心作
 十ハ心作ハ心作ハ心作

夜半の月影をよみてを
 けりて人も人づれを果
 月影をよみてを果
 の月影をよみてを果
 なんぞよみてを果
 らんぞよみてを果
 らんぞよみてを果



十の月影をよみてを
 けりて人も人づれを果
 月影をよみてを果
 の月影をよみてを果
 なんぞよみてを果
 らんぞよみてを果
 らんぞよみてを果



上生惠
 上二日



うたをよ
 ちり

坂上是則 五百七十四



うたをよ
 ちり

古く糸糸五林可

けふはあつた山をよめてよめる山川
ふせの木のてをひまふ吹くけ
けふはあつた山をよめてよめる山川
ふせの木のてをひまふ吹くけ
もあつた山をよめてよめる山川
ふせの木のてをひまふ吹くけ
とあつた山をよめてよめる山川
ふせの木のてをひまふ吹くけ



古く糸糸五林可

けふはあつた山をよめてよめる山川
ふせの木のてをひまふ吹くけ
けふはあつた山をよめてよめる山川
ふせの木のてをひまふ吹くけ
もあつた山をよめてよめる山川
ふせの木のてをひまふ吹くけ
とあつた山をよめてよめる山川
ふせの木のてをひまふ吹くけ



春道列樹

上三回ト



あつた山をよめてよめる山川
ふせの木のてをひまふ吹くけ

紀友則 九百四十四



あつた山をよめてよめる山川
ふせの木のてをひまふ吹くけ

古今身二夏可
 けんは夏のよみ終るる
 初めゆりこころとよめくま
 とぞれぬ子夜がゆめ
 月が未入鏡の中
 わんこころ月も入れぬ
 くよわの幸さなをのよみ終る
 さふまて月よ何てわんこ
 りよめくま



後推身六秋可
 けんはあれたのふゆとつゆの
 おさみちたをゆめ
 風の吹て枝はたけ
 うつやけあま
 のよめくま
 かつめくま
 ちんこ



清原深妻
 七月
 七百年



あけ
 める
 月やどらん

文屋朝康
 八月
 八百五十四



あつゆに
 風の吹
 秋の
 けん
 けん
 と見え
 むぞらん

後拾遺第十回
 此心物もろくもなほかくかり
 人のかたがるもの後志
 母心神とてあつては
 とはなることよか
 つかうするをかく
 たがひつゝの義と
 八あつたのちを
 かなうとてつゝ



拾遺第十二回
 けむらふとあつては
 一はむらふとあつては
 歎つるふとあつては
 ちのあつては
 ちのあつては
 ちのあつては



清原元捕
 六百五十五

神と
 りつゝ
 りつゝ
 りつゝ
 りつゝ



中納言教忠
 八百五十五

りつゝ
 りつゝ
 りつゝ
 りつゝ



拾遺集第十一卷
 けんはよの中あつて人
 あつていふあつていふ
 多し一はあつていふ
 多し一はあつていふ
 あれがあつていふ
 けんはよの中あつて人
 あつていふあつていふ
 多し一はあつていふ
 多し一はあつていふ
 あれがあつていふ



拾遺集第十五卷
 けんはよの中あつて人
 あつていふあつていふ
 多し一はあつていふ
 多し一はあつていふ
 あれがあつていふ
 けんはよの中あつて人
 あつていふあつていふ
 多し一はあつていふ
 多し一はあつていふ
 あれがあつていふ



中納言朝忠
 上三回



けんはよの中あつて人
 あつていふあつていふ
 多し一はあつていふ
 多し一はあつていふ
 あれがあつていふ



けんはよの中あつて人
 あつていふあつていふ
 多し一はあつていふ
 多し一はあつていふ
 あれがあつていふ

新古今第十一巻の
 けふは法師とてさうんぶから
 せんかまきふたよりと笑ひて
 せんかまきふたよりと笑ひて
 のたりのたりのたりのたりの
 しるしをいふたふたのたりの
 ちかすよりたはたのたりの
 とせいのたりのたりの



拾遺第二巻の
 けふは法師とてさうんぶから
 せんかまきふたよりと笑ひて
 のたりのたりのたりのたりの
 しるしをいふたふたのたりの
 ちかすよりたはたのたりの
 とせいのたりのたりの



そののたりのたりのたりの
 ちかすよりたはたのたりの
 とせいのたりのたりの



ちかすよりたはたのたりの
 とせいのたりのたりの

法師 八百十四



法師 八百十四



後拾遺第十二巻

けいんハ一ツびあつたあつが命も
そとんとあつがあつたあつた
ワル名あつたあつたあつたあつた
日ハあつたあつたあつたあつた
たつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた



後拾遺第十一巻

けいんハ一ツびあつたあつが命も
そとんとあつがあつたあつた
ワル名あつたあつたあつたあつた
日ハあつたあつたあつたあつた
たつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた



後拾遺第十一巻

あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた



後拾遺第十一巻

あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた



後拾遺才十二巻
 心はるる山はのさう
 といふんめしはのむのなを
 ながあびるはいまこもひを
 ひとれまふとまをれがはを
 うとやりすはたふさといふ
 言ふ人ハ後一糸屋の曲の
 と大武をりのりがつまる
 とてらるるの作考



後十選第十一巻
 けんはすうとては日れさ
 知をもはるはくふん
 都る人のりやうとつや
 らふふ月ハさうさ
 心のふんわりなりはる
 ていさやたるさ人のん
 こてこさうとつやうて
 もはわらうらふ月のさ



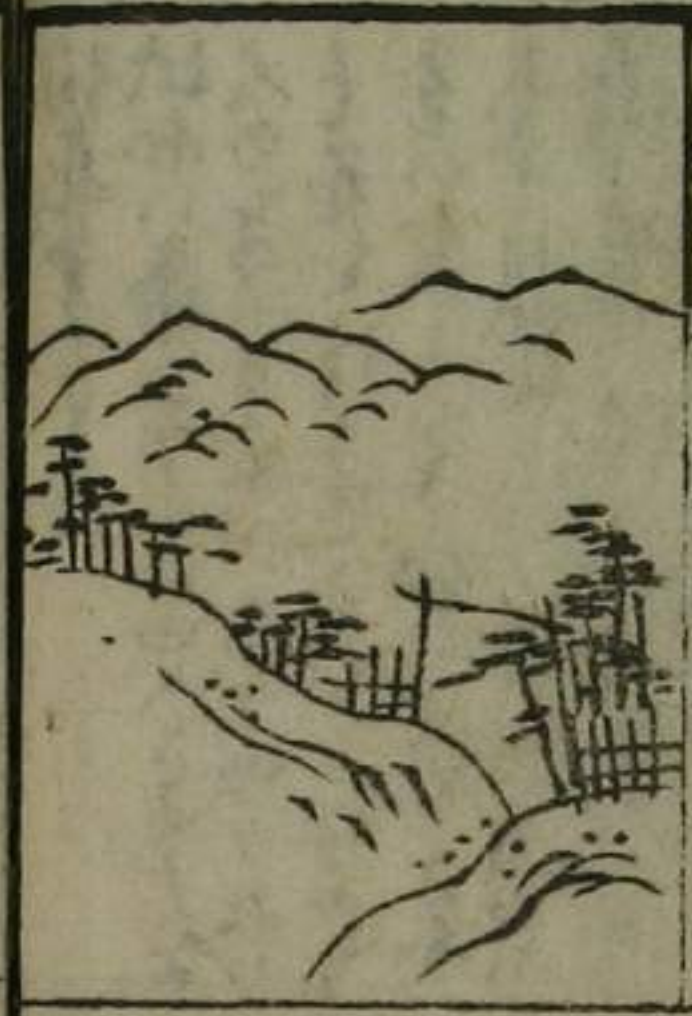
大武三位
 ありま
 いさの
 さう系
 凡ちけだ
 りさ
 人さ
 定政
 八百五十五
 三十一



あまのり
 赤條
 やさう
 糸
 もの
 あけ
 か
 ま
 月



後拾遺才十二雜句
 けんはまらうしやうんしんのふこ
 さうれおあげてくるおめん
 こくとお開のあさるをあんあ
 けいものまのよるおわりをまき
 くれをまのよるおわりをまき
 せいのけんわけするりはてあ
 そねとまのよるおわりをまき
 あふさうのよるおわりをまき



後拾遺才十二
 けんはまらうしやうんしんのふこ
 さうれおあげてくるおめん
 こくとお開のあさるをあんあ
 けいものまのよるおわりをまき
 くれをまのよるおわりをまき
 せいのけんわけするりはてあ
 そねとまのよるおわりをまき
 あふさうのよるおわりをまき



世のせうかをん 日八百十
 清か納言



左系大吏乃雅 日八百
 今ハた
 おい
 たへん
 を
 けり
 ひとびと
 ありもがな



今更なる八重の
 けむたりのをぬくはふか
 うらささたるをふか
 かけやとわあざんまら
 をけまらさるは信はあ
 人のぬくわんまらさか
 ちまらぬのぬくまら
 つまらぬのぬくまら
 まらぬのぬくまら



後拾遺第一
 けむたりのをぬくはふか
 うらささたるをふか
 かけやとわあざんまら
 をけまらさるは信はあ
 人のぬくわんまらさか
 ちまらぬのぬくまら
 つまらぬのぬくまら
 まらぬのぬくまら



結子内親王
 家記
 けむたりのをぬくはふか
 うらささたるをふか
 かけやとわあざんまら
 をけまらさるは信はあ
 人のぬくわんまらさか
 ちまらぬのぬくまら
 つまらぬのぬくまら
 まらぬのぬくまら



前中納言
 けむたりのをぬくはふか
 うらささたるをふか
 かけやとわあざんまら
 をけまらさるは信はあ
 人のぬくわんまらさか
 ちまらぬのぬくまら
 つまらぬのぬくまら
 まらぬのぬくまら



句紀第十雜字

けんハワのまハうの猛名
かりなまの海にわがて極ま
まふまの海にわがて極ま
てまふまの海にわがて極ま
久うのまの海にわがて極ま
てまふまの海にわがて極ま
てまふまの海にわがて極ま
てまふまの海にわがて極ま



句紀第十一

けんハワのまハうの猛名
かりなまの海にわがて極ま
まふまの海にわがて極ま
てまふまの海にわがて極ま
久うのまの海にわがて極ま
てまふまの海にわがて極ま
てまふまの海にわがて極ま
てまふまの海にわがて極ま



法性寺入前園白鳥歌集

和田のつとて
おろし
おろし
おろし
おろし
おろし
おろし
おろし



法性寺

法性寺
法性寺
法性寺
法性寺
法性寺
法性寺
法性寺
法性寺



子載第十...
 いかんか...
 人の心...
 らん...
 笑...
 かん...
 かん...
 い...



の我...
 け...
 さ...
 こ...
 と...
 と...
 と...
 の...



待賢門院
 堀川



か...
 ら...
 くら...
 記...
 の...
 四月九
 十四年

後徳大寺大信

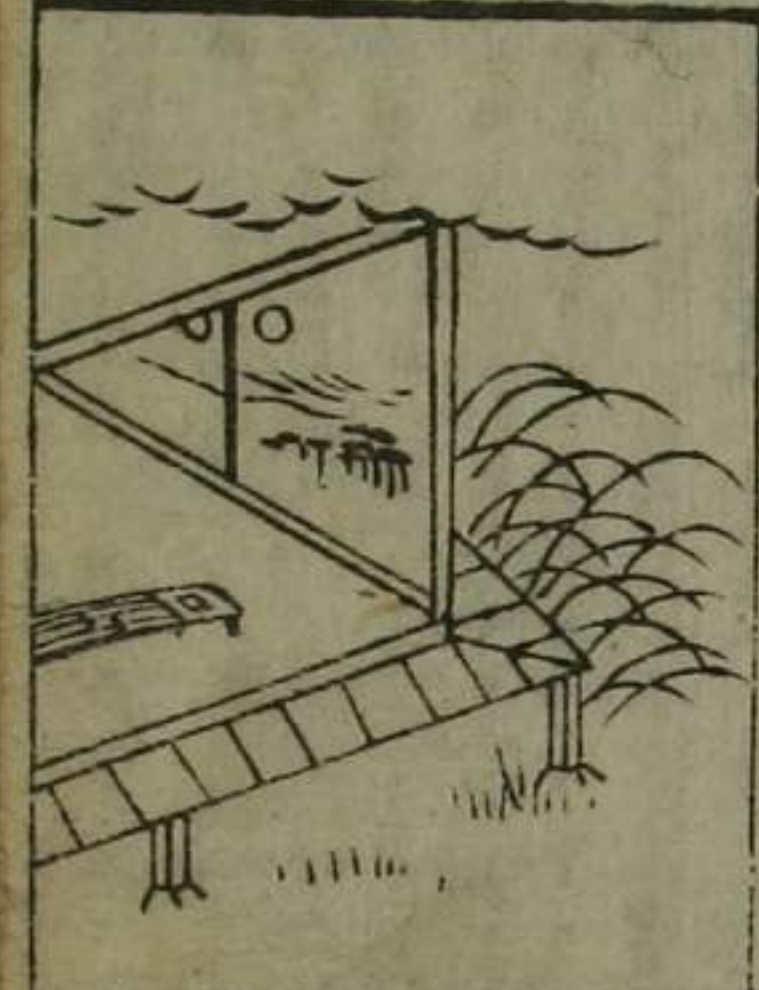


か...
 ひ...
 け...
 し...

千載系舟十三巻
 けんげいのかりねのてらねを
 えんあつたをなせぬとら先
 づらむ面白くもなだまは
 よめ人ちりりなるかた
 のあつたをなせぬとら先



新古今第十一巻
 はかばかのまゝおひ押さへて
 月日とあるまじくても今下の
 らんをぬかすこのよりの
 けりしとていひてはかたの
 けりしとていひてはかたの
 ねとていひてはかたの



皇朝院別当有



かりいよは
 わの
 うりねは
 ひよ
 りと
 つてや
 ちりりなるかた

式子内親王 日百



たまのけりしとていひては
 けりしとていひては
 ねとていひては

ふ裁兼才十に多
 びんあまの社にめぐりはるこ
 けのむらむれをふすひまも
 けあふつむりてあれたさの
 うつるといふかかろく袖ハ
 相のさよかりてやまてはこ
 ねさのふはまのまのちのま
 こいそとがふすとさうまのま
 とせむとん



あまの
 神
 大浦
 上
 下



新古今御五枝
 けんかむらあはさひりふひり
 ねてふりくまのまのまのま
 鳴るまよふまよふまよふま
 くのまよふまよふまよふま
 ねとあふまよふまよふま
 こいそとがふすとさうまのま
 とせむとん



後系極極政
 日
 二年



新古今集才尺格
 けいふのふりしの山の秋風とよ
 史なるはまらうとよまはだて
 けしあきの名の切なるふし
 ちふふ夜うけのちのちのち
 ちふふてひふふちのちのち
 とたふのてのちのちのち
 くもるやまのちのちのち
 めらうてのちのちのち



新古今集才尺格
 けいふのふりしの山の秋風とよ
 史なるはまらうとよまはだて
 けしあきの名の切なるふし
 ちふふ夜うけのちのちのち
 ちふふてひふふちのちのち
 とたふのてのちのちのち
 くもるやまのちのちのち
 めらうてのちのちのち



千載系分十七雜
 けいふのおけいふのちのちのち
 のちのちのちのちのちのち
 のちのちのちのちのちのち
 のちのちのちのちのちのち
 のちのちのちのちのちのち
 のちのちのちのちのちのち
 のちのちのちのちのちのち
 のちのちのちのちのちのち
 のちのちのちのちのちのち
 のちのちのちのちのちのち



新古今集才尺格
 けいふのおけいふのちのちのち
 のちのちのちのちのちのち
 のちのちのちのちのちのち
 のちのちのちのちのちのち
 のちのちのちのちのちのち
 のちのちのちのちのちのち
 のちのちのちのちのちのち
 のちのちのちのちのちのち
 のちのちのちのちのちのち
 のちのちのちのちのちのち



勢勅様才十五雜奇
 けいふらうけてちる花の愛は
 かなしき心付て人のいふ
 み一花きかぬ事とありけり
 あれは金かきつるは
 て我も我有るは
 ありけり心付て
 のちも心付て
 ありけり心付て



勢勅様才十五雑奇
 けいふらうけてちる花の愛は
 かなしき心付て人のいふ
 み一花きかぬ事とありけり
 あれは金かきつるは
 て我も我有るは
 ありけり心付て
 のちも心付て
 ありけり心付て



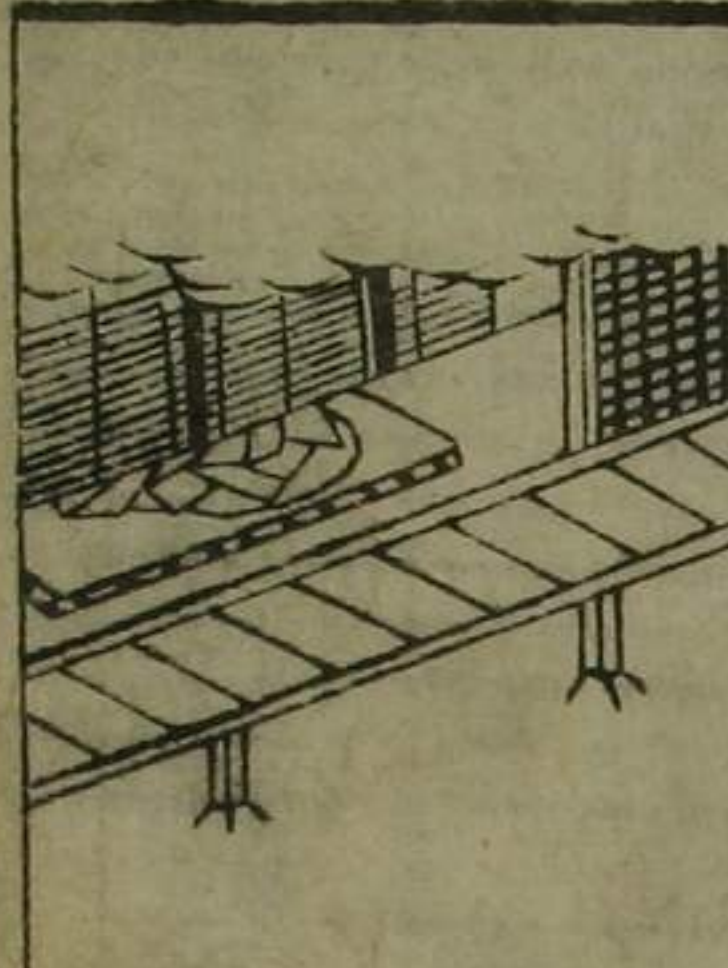
勢勅様才十五雑奇
 けいふらうけてちる花の愛は
 かなしき心付て人のいふ
 み一花きかぬ事とありけり
 あれは金かきつるは
 て我も我有るは
 ありけり心付て
 のちも心付て
 ありけり心付て

勢勅様才十五雑奇
 けいふらうけてちる花の愛は
 かなしき心付て人のいふ
 み一花きかぬ事とありけり
 あれは金かきつるは
 て我も我有るは
 ありけり心付て
 のちも心付て
 ありけり心付て

幼物抗才三反歌
 けをきつの小川多きおしこふ月
 後守り川に月をよそなうと推
 おふりひきとてさるる清い水とて
 之たぐれぬ海をふあすはあまを
 ちのけはちれを共ぬ振するさ
 友といふるや秋のうらた振
 とさすこぬてかたさうのちと
 ちのけはちれを共ぬ振するさ



後後振才七雜子
 けをきつ王乃うりちをばる茶
 めのよと歌をばる人もお人も
 恨はハよの人のをさあてて
 治がたれたんて人のをさあてて
 よれたあ人もよれたあ人も
 されたあ人もよれたあ人も
 うらたあ人もよれたあ人も



正三位家隆
 と三日が

かぞへ
 乃文
 ぐれ
 御被ぞ
 ちのけの
 ちのけの



後鳥羽院
 六百十八

人もの
 ちのけの
 ちのけの
 ちのけの



